

## マルコによる福音書 6:45-52 「ここにおられるのは神、そのお方」

2024年11月10日(主の日)

前回マルコによる福音書の説教の時に聞きましたのは、主イエスが5つのパンと2匹の魚で5,000人の群衆をお腹いっぱいにした奇跡についてでした。そして本日は湖の上をお歩きになった、これも奇跡の話です。そして続けて聞きましたのは病人をお癒やしになった、しかし、ここでは主イエスが直接癒しをなさったということよりも、主イエスの服の裾に触れた者がみな癒やされた、という結論が記されています。これも奇跡の話です。5,000人の食事の箇所の説教では、奇跡そのものについてはほとんど触れませんでした。このことがどのように起こったか、あるいはどう理解すればよいか、ということは、礼拝の説教においてはわたしたちはあまり興味がないからです。けれども、本日の箇所に記されますように、湖の上を歩く奇跡の最後には弟子たちが非常に驚いた理由として、「パンの出来事を理解せず、心が鈍くなっていからである」とまとめられています。やはりパンの出来事をどう理解するか、ふれないわけにはいかないようです。問題なのは、この水上歩行の奇跡とどうやら関係があるようだ、ということです。それはやはり、主イエスがどうやって水の上を歩いたか、ではなくて、弟子たちは何を理解しなかったのか、ということが問題になっているようです。パンの出来事を正しく理解していれば、この水上歩行の意味もわかった、ということなのでしょうけれど、いったいどう理解すればいいのか、一緒に御言葉が語られていることを聞きたいと思います。

主イエスはパンと魚をみんなにお配りになって満腹させた後、すぐに弟子たちを舟に乗せて湖の向こう岸に行くようにと指示なさいました。ひょっとしたら、「いえいえ、イエス様、群衆を解散させるのはわたしたちの仕事です。お手間をとらせるわけにはいきません」などというやりとりがあって、「強いて」舟にお乗せになったということも想像できなくはありません。あるいは、ペトロをはじめ漁師だった弟子たちが、「先生、もう夕方です。今から舟に乗るのはよくありません」と言ったところ、それでも行くように、と主イエスが強いたのかもしれませんが。けれども、この「強いて」ということばは、それ以上の意味を持つ言葉です。新約聖書のほとんどの箇所ではこの言葉は「なにかを無理やりさせる/させられる」という意味で使われていますが、印象的な箇所が一つ、コリントの信徒への手紙一 9:16でパウロが自分が福音を宣べ伝える使徒であることについてこうしています。「わたしが福音を告げ知らせても、それはわたしの誇りにはなりません。そうせずにはいられないことだからです。福音を告げ知らせないなら、わたしは不幸なのです」この、「そうせずにはいられない」という言葉が「強いて」と同じ言葉なのです。強いてとか無理やりというのは人にやらされたり、やらせたりする時に用いる言葉ですが、ここではパウロは自分自身が「そうせずにはいられない」と言います。「そうせずにはい

られない」とは自分の心からわきでるような思いをあらわしますが、このことをパウロは、神から与えられた使命、定めによって福音を宣べ伝えている、というのです。神から与えられた定めが、自分自身の思いと一つに合わさっている。強いるとは、現代のわたしたちはたいて自分の意に反することをやらされる時に使うのでしようけれど、その上で思い一つとなっているのです。信仰生活においては、自分の思いやフィーリングと違うことをするようにと強いられることがあります。必ずしも教会がなすべきこと、神がするようにとおっしゃる御心と自分の思いが一致しているとは限らないのです。それは、怠けたい時にやらなくてはならないことがある、というようなことから、自分の納得のいかなさや信念あるいは怒りなどを超えるようにとの御心であることもあります。この時舟に乗っていたはずのペトロも、復活の主に出会ったときに、あなたはこの先、腰に紐を結びつけられ、行きたくないところに連れて行かれるだろう、と主イエスに言われてしまいます。もちろん自分の思いと主の御心が一致していればこんなに幸せなことはありません。けれども、自らの思いを超えた主の思いに従うところに、弟子たちは教会を作ったのです。ここでは、主イエスは強いて弟子たちを舟に乗せて反対側に行くようにと指示なさいました。そして、この小舟は逆風で漕ぎ悩むはめになるのです。「ほらいったじゃないか」と思った漁師の弟子がいたかもしれません。教会はいつも世にあって逆風の中を歩んできました。主イエスの福音、神を愛し、人を愛して生きる生き方は、かならずしも簡単に人々や社会に受け入れられるわけではないからです。ユダヤ教には理解されずに追い出され、ローマでは迫害されました。帝国の国教になった後も見た目には国中に教会が広まってよかったように見えますが、権力争いがおこり、また権力をもちたいという誘惑に負けてしまいました。わたしたちの教会もこの世にあって、逆風の中を進んでいます。現代でも、自分が好きに生きればいい、他の人はお構いなしだ、という風潮、お金や地位だけが人性を決めるといった価値観の逆風の中をわたしたちは漕いでいます。全然進まない思いがあります。主イエスが無理やりなさるからだ、という思いが湧いてきます。主イエスは世の価値観において、らくちんな道を歩ませてはくださらないのかもしれませんが。けれども、主イエスはいじわるをしたり、わたしたちを最初から大変な目にあわせたいなどとはおもってはおられません。ただ、福音を携えて、主の命に生きるものは世においては逆風にあうことがある、そういう信仰者の現実があるということです。

だからこそ、この逆風に漕ぎ悩む弟子たちのところに主イエスが来てくださいました。主イエスは山で祈っておられたはずで、父なる神との交わりの中におられましたが、弟子たちの困難を知って助けにきてくださったのです。こう記されています「(イエスは)湖の上を歩いて弟子たちのところに行き、そばを通り過ぎようとされた」しかしここで、どうしてもひっかかるのは、水の上を歩かれたことよりも、「通り過ぎる」というのはどういうことなのか、ということです。もし助けにきてくださったのなら、通り過ぎようとなさるとはいったいどういうことか。実は、今日の箇所は、旧約聖書で神様が現れること

をイメージする言葉で溢れています。「通り過ぎる」もそのうちの一つなのです。主イエスは祈るためでしたが、弟子たちからしばらく離れておられたこと、水上を歩いて奇跡的に登場なさったこと、弟子たちがそれを主イエス、神とわからなかったこと、「わたした。」という言葉と「恐れることはない」という言葉、そしてこの通り過ぎようとされたこと。

神が水の上を歩かれることについては神と人と神にきづかないこととあわせてヨブ記では、ヨブが神への畏れを告白する箇所にこう記されます「神は自ら天を広げ、海の高波を踏み砕かれる。……神がそばを通られてもわたしは気づかず、過ぎ行かれてもそれと悟らない」(ヨブ記 9:8、11)。また、詩編77編の後半、主の救いの御業を賛美するところでこう歌います「あなたの道は海の中にあり、あなたの通られる道は大水の中にある。あなたの踏み行かれる跡を知る者はない。」(詩編 77:20)。弟子たちは、主イエスを見ても幽霊だと思い、主イエスだとはわかりませんでした。神は自ら人間の前にあらわれてくださいますが、人はそれにきづかないのです。出エジプト記で燃える柴に神がモーセに現れたとき、モーセは不思議に思って近づきますが、神が語られて「ここは聖なる場所だ」とおっしゃいます。そして、主に出会った者は恐れます。神は、圧倒的な力をもっておられ、聖なる方であってわたしたちはそのお姿をみたら滅んでしまうほどです。しかし、主はおっしゃいます。「恐れるな」それは、滅ぼすのではなく生かしてくださる約束にもとづく安心を与えてくださいます。わたしたちが神をさがしたり、理解したり説明したりするのではなく、神の方がその姿をあらわし、わたしたちを御前に招いてくださるからです。そして「通り過ぎる」ですが、すでに詩編にもでてきましたが、出エジプト記(33:19~22)で、モーセが一人でイスラエルの民を導くことをこわがっていた時、神が恵みをもってともにいてくださることをお語りになるところで用いられる言葉です。「見よ、一つの場所がわたしの傍らにある。あなたはその岩のそばに立ちなさい。わが栄光が通り過ぎるとき、わたしはあなたをその岩の裂け目に入れ、わたしが通り過ぎるまで、わたしの手であなたを覆う。わたしが手を離すとき、あなたはわたしの後ろを見るが、わたしの顔は見えない」何をいっているかということ、神がともにいてくださるのだけれども、その御顔を見ることはできないのです。人は神を真正面から、その御顔を見て生きていることはできないからです。だから神は、モーセのところにきてくださいますが、顔を見なくて良いようにそこでは通り過ぎる、そしてモーセはその後ろに従うのです。同じように主イエスは弟子たちの前にあらわれたとき、主イエスはそこを通り過ぎようとなさいました。神のみ前にまっすぐに立つことができない人間のために、けれども、神ご自身が生きておられ、助けてくださることをあざやかにお示しくださったのです。

この福音書を書いたマルコが、その時直接読んでほしいと思った相手・読者——マルコの教会と呼びます——は、この水の上を歩き、通り過ぎようとなさいました主イエスの弟子たちへの現れ方を知り、まさに神がおられる、主イエスは神として弟子たちの前に来られたということを悟ったに違いありません。わたしたちも聞いただけで、おなじようにわかる

ほどに旧約に親しみたいとおもって通読を続けています。何よりも、この福音書をこのように読んだマルコの教会、そしてわたしたちは、主イエスが神であることを知り、そしてまた、この弟子たちのように、逆風の中に、そのことを理解しきれない、信じきれない姿に気が付かされるのです。しかし、このように逆風で漕ぎ悩むわたしたちのところに、主イエスは来てくださいます。すぐに主のお姿を見失ってしまうわたしたちの前に、主イエスの方から近寄り、助けてくださるのです。ここで主イエスがおっしゃった「安心なさい。わたしだ。恐れることはない」との言葉の中で最も大切なのは「わたしだ」という言葉です。主イエスは何度もご自分のことを「わたしだ」とおっしゃったと記されていますので、もう覚えておられるかもしれませんが、これは出エジプト記の「わたしはある。わたしはあるというものだ」という言葉を思い起こさせます。モーセが、エジプトに、イスラエルの民を救い出しにいくようにと命じられた時に、それに抵抗して「民はわたしのことなど信用しないと思います。だから『お前を遣わした神はなんというのだ』と聞くでしょう。なんと答えれば良いのですか、あなたのお名前を教えてください」と頼んだ時、お答えになったのが「わたしはある」というお言葉でした。これは単純に言えば「わたしだ」という言葉なのです。主イエスが「わたしだ」とおっしゃったとき、聖書の読者は、「わたしはある」という父なる神がご自分のお名前を名乗られたことを思い出し、主イエスご自身が神であられることを思い起こすのです。「わたしだ」。「わたしはいる」。生きておられる神が、ご自分から来てくださり、わたしたちとともにいてくださいます。主はひょっとしたらわたしたちを無理やり舟に乗せてしまわれたのかもしれない。けれども、それで自分たちで頑張りなさい、とほうって置かれるのではありません。神であられる主イエスが必ず助けてくださるのです。

残念ながら弟子たちは、ここでそのことがわかりませんでした。「パンの出来事を理解せず」とは、まさにこの主イエスがおられること、神であられる主イエスがいてくださることを理解しなかった、ということです。主イエスは、飼い主のいない羊のような群衆を見て深く憐れみ、神の国をお語りになり、また空腹であった群衆をパンの奇跡で満たされました。主イエスはこのような神であられます。そして、一方、逆風に漕ぎ悩む弟子たちを助けてくださる神であられるのです。この時点では、弟子たちはこのことを理解しませんでした。弟子たちがこのことを本当に理解するのは、主の十字架と復活をまたなくてはなりません。一緒にいる時は理解せず、主イエスが殺されるまで、眼の前から失われるまでわからない、というのが人間なのかもしれませんが、今、わたしたちはすでに復活の主が生きておられることを知っており、主イエスが「わたしだ」とご自分を示してくださることを信仰をもってうけとめて逆風の歩みの中励まされて歩みを続けます。

この「わたしだ」と同じことばが、本日の箇所の後半に示される「イエスがおられる」という言葉です。聖書の言葉では「わたし（が〇〇）だ」という言葉と「わたしがいる」という言葉は同じなのです。主イエスがおられるところ主イエスが「わたしだ」と言われ

るところにはどこでもゲネサレトの人たちは集まってきました。理解しなかった弟子たちとは非常に対照的だと思います。もちろんこの群衆は、主イエスのことを正しく深くは理解していなかったでしょう。けれども、主イエスがおられるところに走り回って集まり、どこでも主イエスがおられるところに癒してほしい友や家族を連れいったのです。このことは今日の箇所では、まったく批判的に、不十分でいけないことのように記されていません。そうではなく、主イエスの偉大な御業があらわされた、喜びの知らせとして記されているのです。わたしたちは主イエスを救い主として告白し、礼拝を第一とした生活をし、終わりの日の希望を持って、神と人とを愛する生活をしています。けれども、まさに今わたしが言いましたように、こういうことをすらすら言えることが大事なのではないのです。主イエスに救いを求めてひたすら走ってどこへでも行く、そういう素朴な信仰がわたしたちの信仰の土台、始めなのではないでしょうか。わたしたち自身の信仰の始め、またこの藤沢北教会の始め、主イエスはひょっとしたら、強いてわたしたちを舟にお乗せになるようなことをなさったかもしれない。けれども、そのことを喜んで受け入れて、主イエスに従う生活を続けたいと思います。「わたしだ」「わたしがここにいる」主イエスご自身、いつでも父なる神に祈り、そしてだからこそわたしたちを助けてくださいます。